

## 明治時代の貸本屋

——その西洋文学の普及に与えた影響——

川戸道昭

### 一 高かった書籍の値段

明治前半の物価と今日のそれとを比較してなにが変わったといつて書籍の価格ほど変わったものはない。そう断定しても決して誇張にはならないほど、当時の書籍の値段は高かった。今日、一般書店の店頭に並ぶ小説類はよほど特別のものを除いて、高くて四、五千円、たいていは二、三千円も出せば購入できる。試みに、これを昼食代と比較すると、一食を六百円として、そのほぼ四、五倍で新刊の海外ミステリーを自室に持ち込み、カウチ・ポテトで好きなだけ読み耽ることができるといふ計算である。この現在の価格基準をもって明治時代の書籍の値段を推し量ってみると、驚くことに、書物は昼食代の五十倍から百倍に達するという結果がでてくる。そんな高値とあらば一般庶民は満足に新趣向の小説さえも手にできなかったことになる。しかし、一方でそれらの小説が、彼ら庶民の旺盛な好奇心をターゲットに出版されたというのにもまた紛れない事実であった。当時の出版界・読書界ではこの二つの事実の間の溝を埋めるべく様々な工夫が試みられることになるのだが、そうした初期の知的文化を支える人々の創意工夫の跡を検証することによって見えてくるのは、日本の近代文学の成立を可能にした新しい形の読者と出版者との関係である。ここではそのなかでもとくに西洋文学の普及と貸本屋ということに焦点を絞って検討をすすめてみることにしたい。

明治前半、書籍代は昼食代の五十倍から百倍もしたと記したが、それには確かな証拠がある。その証拠の一つとして私が最も注目するのは、増田藤之助『日本英学新誌』の編集・発行者、後の早大教授が残した明治二十年前後の出納帳である。増田は、いわずと知れた明治・大正期の英語・英文学界の一大功労者。自らも翻訳文学書を盛んに読み漁っていた増田の出納帳が、当時の

翻訳文学界を支えた読者の立場をうかがうのに二つと得難い好資料であることは論をまつまい。その出納帳の一部は、これまた当時の英語雑誌界の重鎮、喜安□太郎の手で『英語青年』誌上に転載されているので、その記事をもとに、明治二十年前後の諸物価と書籍代の比較を試みることにする。

明治十九年、二十年当時英学生であった増田が、京都と東京において購入した食料を中心とする生活必需品の値段は次の通りである。

〔十九年一月、於京都〕	〔二十年一月以降、於東京〕
うどん	寄席
一銭	五銭
まむし	入浴
三銭	一銭三厘
白米五升	斬髪代
三十五銭	六銭
牛肉	牛肉酒
三銭	十二銭
鶏卵十	牛乳一合
八銭	三銭
焼薯	パン一個
二銭	一銭五厘
饅頭	チャネリ曲馬
二銭	二十銭
入浴代	英語学校月謝
五厘	五十銭
歯磨粉	寓宿料
二銭	二円五十銭
炭一俵	新聞雑誌閲覧料
十三銭五厘	一銭五厘

〔喜安□太郎『湖畔通信・鵜沼通信』（研究社出版、一九七二年）より引用〕

なかには鶏卵のように他に比べるとかなり高額のものもあるが、「うどん」にしても、「まむし」にしても大体は五銭以内に収まっている。先生は鰻が好みであったとみえ、「まむし」のほかに「鰻飯酒 四銭五厘」（於京都）などという出費もある。これらすべてを総合してみると、当時の昼食代金は、だいたい三銭ないしは五銭もだせば充分ということになるだろう。この金額

を同じ時期の書物の値段に当てはめてみるならば、その異常な高値ぶりはつきりする。たとえば増田が当時購入した本で、『ギゾー文明史』は一円、『カッケンボス修辞学』は一円十銭とある。私の手もとにある当時の翻訳文学書を見ても、明治十九年刊行のヴェルヌの『九十七時月世界旅行』(再版)が一円二十銭、同じく『亜非利加内地空中旅行』は一円七十銭とあるから、増田がここに掲げた書物のみが飛び抜けて高価であったというわけではない。つまり、うどんの百五十倍、うな井の三十倍から五十倍も代金を支払わなければヴェルヌの小説を自分の所有物とすることはできなかったことになる。増田が当時、故郷の津から京都まで人力車で旅をした旅費宿泊料が総計一円二十銭、あるいは喜安が明治二十六年に借りて住んだ賄い付きの六畳一間の下宿が月二円五十銭であったという事実にも照らしても、当時の書籍の異常なまでの高値ぶりがうかがわれる。ヴェルヌの翻訳書たった二冊の代金で、なんと、学生一人が賄い付きの下宿に一月生活できたという計算である。

## 二 書籍の発行部数

要するに、当時の書物というのは現在のようになんでも簡単を買って読める大量消費財とは明らかに違っていた。とくに新刊の翻訳書などは、よほど裕福なものでもないかぎり購入することができない贅沢品となっていた。そのことは、当時の書物の発行部数の上からも容易に確認できることである。明治前半の翻訳文学書で、三版、四版が発行されたという例をあまり聞かない。ほとんどが初版、ないしはせいぜい売れても再版どまりである。その初版、再版というのも、一度に刷られる部数といえれば多くて二千部、たいていのものは千部刷ればいいほうであった。実際、明治十五年に丸善から出版された『新体詩抄』は、選者の一人で「出版人」ともなっている井上哲次郎の回想によれば、「部数はハッキリ憶えないが、多分千部ぐらゐであつたらう」ということである。また、これは文学書とは違うが、明治十年代の中頃まで文部省から発行されていた「百科全書」シリーズ中の一書(書名は記されていない)は、明治十三年度の印刷局の報告書によると印刷部数「二千八十六部」であつたとある。あるいは、時代が下って、明治三十六年に刊行された原抱一庵の『聖人か盗賊か』(ブルワー・リットン著『ユージン・アラム』の翻訳)は、「発兌後二十五日にして初版二千尽き、更に十五日にして再版一千五百尽き、竟にまた増版三千部を出すの運を見るに至れり」(本書後篇発祥の折に)とかなりの売れ行きであつたということだが、しかしそれでも、全部合わせて六千五百部と、一万部に

達していないのである。

以上は、明治の翻訳文献をいろいろ調査する中で直接わたしの目にとまった書籍の発行部数であるが、そうした数字を裏づける当時の証言が残されているので以下に紹介してみよう。それが掲載されているのは、明治二十五年十二月発行の『早稲田文学』（三十一号）。筆者名は記されていないが、いずれ当時の出版事情に詳しい編集スタッフの一人であったと思われる。

《書籍の売高 再版、三版、四版、五版と広告の表はめざましけれど、一版といふは大概千部にして、再版三版といふは、第一版と共に刷りたるトリオキの千部を二分して表紙だけを改めて売出すが十中七八までの恒例なり。されば真の再版といふは、第四版あたりよりなり。尤も其の昔は正直にて真に再版せしことなれど、近來のは概して此の簡便法を用ふと聞く。差別は只第一版を千部にすると二千部にすると位の処にあり。之によりて案ずれば第九版といふも大まけに積りて、一万部ぐらゐの部数なるべし。近ごろ或書肆のいふ所を聞くに、方今の書籍の最も売れたるものにて、一万五千の上に出でたるは教科用書にして俗受を兼ねたる者のみなり。大概は三千部以下、二千部位がトマリなりとか》

道理で、明治二十年代までの翻訳文学で三版、四版をあまり目にしないわけだ。「一版といふは大概千部にして」とあるのをそのまま信じるとすると、当時の翻訳文学書というのは二千部程度の発行がせいぜいであったということになる。一冊の書物が昼食代金の数十倍もする高価な値段であった上に、発行部数が二千部程度と限られていたとなると、一般読者が文学書を手にする機会はますます遠のいてしまうことになる。ということとは、西洋起源の小説本は彼らにとってしよせん高嶺の花にすぎなかったのか。いや、もちろん、そんなことはない。当時、最新の科学知識を駆使したヴェルヌの小説が、あるいは「政治小説」と銘打ったスコットの歴史小説が、さらには西洋の浮気男女の生熊を白日の下に晒したポツカッチョの密通物語が上梓されたのは、ほかでもない、彼ら一般読者の旺盛な好奇心を当て込んだことであつたと思われる。新しい西国の物語の出版を心から待ち望んでいた彼らの存在なくして、翻訳小説の流行はとうてい望むべくもなかったのである。

### 三 貸本屋の利用

では、一般の読者や学生は、それほど高価で数の少ない小説本を一体どのようにして読むことができたのか。その方法は、第一に明治になって台頭してきた新形式の貸本屋を利用すること、第二に公共図書館を利用することであった。あるいはブランド・ニューの新刊書でなければ古書の購入という方法もあったろう。古書のこととはひとまずおくとして、最初に挙げた貸本屋と公共図書館は、明治初期の出版文化の育成に必要な不可欠な役割を果たしたものであるとして充分注目に値する。

明治二十四年に創刊された『早稲田文学』の第一号をみると、当時の文学界の動静を報じた「時文評論」という欄があり、その最後のところに「時文に多少因縁深きもの」として東京の公・私立の学校や新聞・雑誌の名前を通覧しうる一覽表が掲げられている。注目すべきは、その最後の項に「共同文庫」なる一欄が設けられている点である。「共同文庫」とはすなわち公共図書館と貸本屋のことであるが、その具体名として、次のような名前が挙げられている（貸本屋は住所付き）。

共同文庫 東京図書館 帝国大学図書館 教育図書館 共益館（京橋区三十間掘） 大川屋（浅草三よし町） 本鉄（浅草今戸町） 加藤（浅草今戸町） よしのや（京橋南鍋町） 長門屋（新橋） 丸惣（深川洲崎） 本惣（深川） 桜井吉兵衛（本郷東片町） 池清（牛込） いろはや（神田鍋町） 伊勢新（下谷）

東京で文学を講ずる学校といえば「文科大学」「高等中学校」「慶応義塾」「東京専門学校」、新聞は「読売」「国民」「報知」、そして文学書を読みたければ「東京図書館」「帝国大学図書館」「共益館」「いろはや」というわけである。「東京図書館」と同列に「共益館」「いろはや」等の貸本店が並んでいるところに、この時代ならではの事情がしのばれて興味深い。今の時代に置き換えてみるならば、国会図書館、東大図書館と町の貸本屋が同列に置かれているのと同じことになる。われわれ現代人の目にはなんとも不つりあいな取合わせにも見えるが、当時の読者の立場に立てば、不つりあいでなくてもなんでもなくあたりまえのことであった。その頃の読者が高価な本を買わずに「共同」図書を利用しようと思えば方法はただ二つ、「東京図書館」（こちらも明治二十四年当時は有料であった）か貸本屋かという選択にならざるをえなかったのである。この表から読み取れるのは当時のそう

した一般読者を取り巻く粗末な読書環境である。今とは比べものにならないほど貧弱な環境ではあったが、それでも好奇心・向学心に燃える読者は、なにがしかの金銭を支払い、さらにその上に一定の規則に縛られながらも、憧れの文学書を求めて貸本屋あるいは東京図書館に足しげく通いつめたのであった。現在国会図書館に所蔵されている明治期の文学書の大半が表紙を失い手垢にまみれているのは、そうした明治の読書人の旺盛な読書欲を物語るなよりの証拠といえよう。『早稲田文学』の創刊号に、文学に縁の深いものとして学校、雑誌、新聞の名前とともに「共同文庫」の名前・所在地が掲げられるというのも、それが当時の学生・読書人にとって数少ない書物の供給源であったという証拠にほかなるまい（とくに貸本屋の所在地が学校や遊郭の近くに集中していることに留意する必要がある）。このように当時の読書人にとって必需の設備ともいえる「共同文庫」について、実際にそれを利用した読者の側とそれを貸した本屋の側の双方の視点に立つてもう少し詳しく内容を検証してみることにはしたい。

#### 四 増田藤之助の利用した貸本

そこで、再び登場願わなければならないのが、前出の増田藤之助である。増田は、明治二十年一月、生活の舞台を京都から東京に移して本格的な英語学習を開始する。東京に移ってからの増田の読書欲は以前にもまして旺盛なもので、時に新書を購入し、あるいは時に貸本店を利用して、広く内外の書籍を読み漁っている。彼の出納帳には例によってそれらの書物の名前と値段の一部が詳しく書きとめられているが、その中から、貸本屋で借りた書物の名前とその見料を抜き出して以下に掲げてみる。

宗教進化論	二銭五厘	印土征略史	三銭〔四十銭〕
印土転覆史	三銭	教育論	三銭
佳人の奇遇	二銭	経国亀鑑	八銭五厘〔二円三十銭〕
日耳曼征略史	七銭五厘〔八十銭〕	花間鶯	二銭五厘
セキスピヤ物語	三銭〔四十五銭〕	明治会話篇	三銭
新日本青年	四銭	ミルトン論	一銭八厘

ここに挙げられている書物の大半は出納帳が書かれた明治二十年当時の新刊書であるが、そのなかで私蔵の書物により定価の特定できた四書については金額を「」の中に掲げておいた。すなわち『印土征略史』（明治十八年、東京同盟出版書肆刊）は定価が四十銭に対し貸本としての見料は三銭、『セキスピヤ物語』（明治十九年、品田大吉刊）は定価が四十五銭のところを見料は三銭ということになる。書物の値段の判明した四書のなかで最も高価な『経国亀鑑』（明治二十年、博聞社刊）でも、一円三十銭の定価に対して見料は八銭五厘ということだから、貸本の代金というのはいずれも定価の一割以内の金額に押さえられていたことが判るのである。この程度ならば、少々やりくりすれば一般読者の手に届かない金額ではない。前述した当時の昼食代金と比較してみても、だいたいその二、三倍程度で、高価な小説本を借り受けることができたという計算になる。

## 五 共益貸本社書籍分類目録

それに対し、本を貸し出した書店の側から当時の貸本事情をうかがうとどういうことになるか。増田の出納帳と同じ明治二十年に刊行された『共益貸本社書籍分類目録』という資料をもとにその辺の状況を探ってみることにしたい。本『目録』（和文五二頁、英文十七頁）は東京の芝三田にあった共益貸本社が発行した同店の「蔵書」目録であり、そこには 和漢書約二千冊、英書約七百冊の合計約二千七百冊の「書名」「著（訳）者姓名」「冊数」「定価」「見料」が掲載されている。先ほどの増田の出納帳に出てきたのと同じ書籍によって、その詳細を確認してみると次のようなものである。

書名	著訳者姓名	冊数	定価	見料
宗教進化論	高橋達郎訳	一	二〇銭〇厘	二銭五厘
印土征略史	末広重恭訳	一	三六〇	三〇
印土転覆史	山田良作訳	一	三〇〇	三〇
佳人之奇遇	柴四郎著	一	三五〇	三〇

経国亀鑑	土岐備補訳	一	一〇〇〇	八五
日耳曼征略史	越川文之助訳	一	八〇〇	七五
セキスピヤ物語	品田太吉訳	一	二五〇	三〇
新日本之青年		一	四〇〇	四〇

〔冊数〕は本の出版時の冊数。「定価」「見料」の単位は厘、たとえば最初の『宗教進化論』の「定価」は二十銭で「見料」は二銭五厘。

ここで注目してもらいたいのは最後の見料である。これを増田の出納帳記載のそれと比べて、金額の違っているのは中ほどの『佳人之奇遇』ただ一書だけで、あとはすべて同額の見料となっている。ひよつとすると、増田が利用していたのはこの共益貸本社ではなかったかと思いたくなるほどよく似た価格設定である。当時の貸本屋の見料が大体同じぐらいに統一されていたということも考えられるので、それを共益貸本社と決めつけるわけにはいかないが、この『目録』が当時の貸本屋の一般的な貸し出し条件を知る上で大変有益な資料であることは間違いない。

本『目録』に関して、もう少し詳しくその内容を点検してみると、第一に目につくのは見料の上にかかれてある定価である。なぜ貸本屋の蔵書目録に書物一冊、一冊の定価が明記されなければならなかったのか。その答えは、巻頭に掲げられている「凡例」の中に見出だされる。すなわち、「此目録ニ記ス所ノ代価ハ、当時普通ノ売買実価ヲ記セシ者ニテ、徒ニ虚飾ノ定価ヲ記セシ者ニアラズ。故ニ若シ此書ヲ紛失、又ハ毀損シテ不用ニ至ラシメタル者ハ此目録ニ記載ノ代価ヲ徴収スル者トス」と。要するに、この『目録』の「定価」というのは、書物を紛失しないしは毀損した際の弁償「代価」として掲げられているのだ。重要なのは、いたずらに虚偽の定価を記したのではなく、すべて現在の「売買実価」を示したという点である。その真偽のほどを確かめるために、先ほどの架蔵の書物の定価と照合してみると、まず二番目の『印土征略史』は、その定価が四十銭とあるのに対し、ここでは三十六銭、同様に『経国亀鑑』は一円三十銭に対し一円、『日耳曼征略史』は両者同額の八十銭、『セキスピヤ物語』は四十五銭に対し二十五銭と、いずれも同額ないしは定価以下の価格になっている。つまり、ここに書いてある「定価」とは、当時の書物の「売買実価」を記したという「凡例」中の言葉のとおりであることがだいたい判断できるのである。

わたしは長年明治の翻訳文学とそれに関連する文献資料を収集してきたが、当時の書物の「売買実価」を明記したと称する資

料を目にしたのはこれがはじめてである。当時の書物は定価を記載していないものが多く、たとえ記載していたとしても「売買実価」とだいたい開きがあるものが少なくなかった。そのことに気がつきつつも、具体的に個々の書籍の実価を確かめる方法が見つからないというのが実情であった。それが今回ここに和・漢・洋二千七百冊にも達する書物の「売買実価」をしるす資料がでてきたのだ。しかも、そこには明治二十年当時日本で出版されていた書物がほとんど網羅されている。これが当時の書物流通の実態を知る上で第一級の資料であることは論をまたないだろう。

それはともかく、話を本目録の内容に戻すと、ここに述べた「売買実価」に対する「見料」の割合は、上の表を見てもわかるとおりおよそ十分の一、増田の出納帳のところで確認したのとほぼ同様の割合になっている。要するに、「売買実価」が一円の本なら十銭で、三十銭の本なら三銭で借り出すことができたということになるが、増田の記述には書かれていなかったことで一つ大事な点は、本を借りるには別に「保証人」を必要としたということである。先ほど述べた「凡例」には、「塾生等ノ諸君ニシテ別ニ保証人ナキ者ハ、総て此目録ニ記シアル代価ノ十分ノ八ヲ預ル者トス」という一項が掲げられている。これは本を貸す側からすれば最低限講じなければならぬ安全対策で、身元の確かでないものに何ら保証も取らず高額な書物を貸し出すわけにはいかなかった。しかし、保証人さえ確保できれば、借りる側にとっては、「売買実価」の十分の一ほどの代金で好きな書物を読み漁ることができるのだから、これほど便利なことにはなかった。ちなみに、これを東京図書館の書物の貸与条件と比べてみると、東京図書館では一回二銭で和書は三種十冊、洋装書は三種三冊を借り受けることができた。ただしこれは館内の閲覧だけに限られるもので、館外に持ち出す「帯出借覧」になると、料金は上がって、「特許閲覧料金五円」で和書五冊、洋装書二冊までを借りられるというものであった(『早稲田文学』二号、明治二十四年十月刊)。要するに、館内で読む分には東京図書館のほうがずっと割安であったが、館外借り出しになるとむしろ条件は共益貸本社のほうが有利であったということになる。『早稲田文学』の創刊号に、「共同文庫」として東京図書館と貸本屋が併載されているというのも、両者にそれぞれ一長一短があつて、借りる側はその目的にあわせた選択をする必要があつたためと考えられる。

では、蔵書の上からみるとどうか。貸本屋は東京図書館に匹肩しうるほどの蔵書を誇っていたのか。先にも述べたとおり、共益貸本社の蔵書は約二千七百冊、それに対し東京図書館のほうは明治二十三年末の調査で約十二万六千五百冊、つまり共益貸本社は東京図書館の約五分の一程度の書物しか有していなかった。しかし、蔵書全体を比べるとそういうことだが、これを最新刊

の小説類にかぎってみた場合どういことになるか。必ずしも、共益貸本社の蔵書が東京図書館のそれに劣るといふことにはならないのではないか。その点を確かめるために、わたしは共益貸本社の『目録』から、明治十年以降に出版された西洋文学の翻訳書を抜き出し一覽表を作ってみた。その結果判つてきたことは、ここには当時出版された翻訳文学書が、発売禁止になつた書物等特別なものをのぞいてほとんどそろつてゐるということである。当時の翻訳文学書の「売買実価」を確認する上でも役に立つので、そのうちの主要な書物を項目ごとにとまとめて以下に掲げてみると、だいたい次のようなものである。

書名	著者姓名	冊数	定価	見料
〔シエイクスピア〕				
人肉質入裁判	井上勤訳	一	一二錢〇厘	一二錢五厘
該撒奇談	坪内雄蔵訳	一	一〇〇〇	七〇
春情浮世之夢	川嶋敬蔵訳	一	六五〇	五〇
羅馬盛衰鑑	上田捨吉訳	一	四〇〇	四〇
セキスビヤ物語	品田太吉訳	一	二五〇	三〇
西洋娘節用	春煙小史訳	一	三五〇	三〇
当世二人女壻	依田百川著	二	六〇〇	四〇
〔その他主要英文学〕				
花柳春話	織田純一郎訳	一	八五錢〇厘	七錢〇厘
欧州奇話奇想春史	丹羽純一郎訳	三	六〇〇	六〇
鶯□□兒回島記	片山平三郎口訳	一	七五〇	六〇
絶世奇談 魯敏孫漂流記	井上勤訳	一	九〇〇	七五
開卷悲憤慨世士伝	坪内雄蔵訳	一	七五〇	五〇
諷世嘲俗繫思談	藤田尾崎合訳	一	一一〇〇	八〇

泰西活劇春窓綺話	服部誠一訳	一	七五〇	六〇
英国小説草葉の露	横山畔呂久訳	一	五〇〇	五〇
寿具徳奇談	牛山鶴堂訳	二	六〇〇	四〇
梅蕾余薫	牛山鶴堂訳	二	各五〇	各五〇
政党余談春鶯囀	関直彦訳	一	二五〇	一三〇
雙鸞春話	牛山良助訳	一	五〇〇	五〇
[ヴェルヌ]				
八十日間世界一周	川嶋忠之助訳	二	五〇錢〇厘	七錢〇厘
月世界旅行	井上勤訳	一	五〇〇	四〇
三十五日間 空中旅行	井上勤訳	一	六〇〇	六五
月世界一周	井上勤訳	一	七五〇	六〇
六万英里海底紀行	井上勤訳	一	一二〇〇	七五
五大州中海底紀行	大平三次訳	一	六〇〇	五〇
海底旅行	三木高須同訳	一	五〇〇	四〇
自由之征矢	井上勤訳	一	二〇〇	二五
万里絶域 北極旅行	福田直彦訳	一	六〇〇	五〇
政治小説佳人之血涙	井上勤訳	一	三五〇	三〇
[その他]				
露国 奇聞花心蝶思録	高須治助訳	一	二〇錢〇厘	二錢〇厘
全世界一大奇書	井上勤訳	二	三五〇	四〇
禽獸世界狐之裁判	井上勤訳	一	六〇〇	六五
北欧血戦余塵	森体訳	一	四〇〇	三五

伊曾保物語	大久保常吉訳	一	一〇〇	二〇
露国情史スミスマリー之伝	高須治助訳	一	二〇〇	二五
想夫恋	佐野尚訳	一	四〇〇	二五
鴛鴦奇観	近藤東之助訳	一	一五〇	三〇
西洋 古事 神仙叢話	桐南居士訳	廿	三五〇	三五

これらの書物は、全体を「和文書門」「漢文書門」「訳書門」「英書門」の四部門に分類したうちの「訳書門」「小説書」のところに一括掲載されているもので、「小説書」の全体に占める割合は約十三、四パーセント（およそ三百四十冊）、そのうち西洋文学の翻訳はざっと数えて六十冊程度である。なかでも、わたしが注目するのは、明治二十年に出版された最新刊の書物である。この『目録』が編まれたのは同年の六月のことであったが、それに最も近い発行日の書物は明治二十年四月（日付の記載なし）出版の、たとえば『恋愛と嫉妬』『谷間之鶯』といった書物である。つまり、わずか二月前に発行された書物がここには掲載されているのだ。ということは、目録の刊行に要した月日を差し引くと、店に備えられたのはおそらく発売と同時にであったと考えられる。貸本店が東京図書館などの公共図書館と比べて、圧倒的な優位に立っていたと思われるのは、この図書の店頭に並ぶまでの時間の早さにあったということが想像されるのである。

ついでながら、もうひとつこの『目録』で注目される点を挙げておくと、それは「英書部門」がほかにも増して充実していることである。わたしの計算したところによると英書の蔵書数は全部で六九六冊、共益貸本社が有する蔵書全体の約四分の一を占めている。そのなかで「文学及小説類」に属する書物の割合は約五分の一の一三四冊で、これは当時東京図書館に所蔵されていた文学関係の英書の数がおよそ三七〇冊（明治十七年刊行の同館の洋書目録による）にとどまっていたことを考えると、決してあなごれない数字である。しかも、そのなかには、シェイクスピアもあればディケンズもある、さらにはスコットもリットンもディズレーリーも当時流行した作品は一通り揃っている。共益貸本社は庶民ばかりか、知的レヴェルの相当に高い人たち（多くは増田のように欧米諸国の学問を身につけようとする学生であったと思われる）にとっても、なくてはならぬ存在になっていたようだ。そういえば、坪内逍遙の『当世書生氣質』に登場するアンダーウッドの『英文学集』などもちゃんとそこには備えられていた。当

時の英学生にとつて必読の書物となつていたその洋書の定価は三円五十銭ときわめて高価であつたが、見料のほうは十五銭と意外なほど安く押さえられている。学校でそれを無償で借覧できるものはいいが、そうでないものにとつて三円五十銭はあまりに高すぎる。彼らに唯一残されていたのは、貸本屋でそれを借り受けて、必死に写し取ることだけであつたと思われる。共益貸本社が世の英学生に対して果たした貢献はわれわれ現代人の想像を越えるものがあつた。

## 六 近代的な貸本店の生まれた背景

共益貸本社のような大型貸本店が出現した背景には、どこことなく、十九世紀後半にイギリスで流行したサーキュレイティング・ライブラリー（と称する貸本屋）が栄えた背景を想起させるものがある。今わたしの手もとには、そうした貸本屋の一つであるロンドン・ライブラリーが一八八八（明治二十一年）年に発行した蔵書目録がある。そこに収められている書物の数は、十万余冊と共益貸本社の蔵書数をはるかに凌ぐものがあるが、それらの書物を定価よりかなり安価な金額で人々に貸し出すという基本シテムは変わらない。会員になるには入金金六ポンドを支払い、年間二ポンドの費用で一時に一〇冊まで借りられるというのが基本的な借覧条件であつたようだが、そのような会員制の貸本屋はロンドン・ライブラリー以外にも多数存在した。なかでも有名なのはロンドンに本店のあつたミューデーという貸本屋で、その会員数は二万五千人に達し、蔵書の数は七百五十万冊にも及んだという。どうしてそのように人気を博したのかというと、当時はイギリスにおいても日本と同様、書物の値段が大変高かつたということに主な原因があつた。ヴィクトリア時代に流行した三巻からなる大部の小説本（たとえば当時人気の高かつたウィルキー・コリンズの『白衣の女』もその一つ）などは、平均的な労働者の週給にも匹敵する値段であつたと、高橋哲雄氏の『ミステリーの社会学』という書物は伝えている（中公新書、一九八三年）。これでは一般の読者はとても手が出せない。そこで流行したのが、出版社と読者の間を取りもつ貸本店であつたというわけである。もちろんその背景には、教育環境・社会環境が整備され、人々が読書を楽しむことのできる条件が次第に整つてきたという要因もあつた。それまで書物とは縁の遠かつた人々が、大挙して読書界に参入し始めたのである。彼らの参加は、そうした大型貸本店の存立を可能にしたばかりか、そこで貸し出される本の種類、さらには出版社が発行する書籍の内容にまで大きな影響を及ぼすことになつていったのである。

日本の場合も、共益貸本社等の近代的な貸本店が出現する明治二十年前後にはちようどこれと同じような現象が見られた。国民皆教育の理念を基本とする学校教育の成果が徐々に現れ、国民の識字率が大きく向上する一方で、森有礼が文部大臣に就任する明治十八年以降は、西洋の学問・文化を吸収する一手段として英語を学習しようという意欲が急速に高まった。明治二十一年に創立された国民英学会（という英語学校）の校長を長年勤めた磯辺弥一郎はその頃の英語学習熱を、「明治十八、九年より起りて同二十四年頃迄継続したる英学の狂流行」と表現している（拙著『磯辺弥一郎と「中外英字新聞」』〔ナダ書房、一九九五年〕参照）。前述の増田藤之助が故郷の津を後にして東京に出てきた目的も、ほかでもないそうした英学を授ける学校に学ぶためであったことは、出納帳に「英語学校入学金」「英語学校月謝」の記載があるのを見てもわかる。増田は慶応元（一八六五）年の生れだから、彼が貸本屋で上記の書物を借り出した明治二十（一八八七）年は二十二歳、今でいえばちようど大学生ぐらいの年齢である。その彼を当時の英学熱を支えていた多数の学生の一人と考えて、書物の調達方法を分析すると、当時の読書界を取り巻く環境がおぼろげながら見えてくる。増田は、「ラセラス伝（十五銭）」「テールスフロムセクスビヤ（十八銭）」「ヂクソン文典（三十八銭）」「コック作文修辞学（五十銭）」といったいわば英学生の必読書は一般の書店で購入しているが、『佳人之奇遇』『花間鶯』『新日本之青年』ような流行の書物、あるいは『セクスビヤ物語』『印土政略史』『経国亀鑑』といった翻訳書は、購入はせずに貸本店から借りている。つまり、どうしても手もとに置いておかなければならない教科書類は購入するが、流行の小説や参考書などは貸本屋で借りて読むというように、調達法を分けていた。購入と借用の割合は、はっきりしたことは判らないが、だいたい購入した書籍の半数程度は貸本屋からまかなっていた様子が出納帳からはうかがえる。増田のような学生が千人二千人と集まれば、少なくとも貸本屋の一家や二店充分に営業が成り立つ状況にあったと思われるのである。

明治十八、九年からはじまった英学の流行が共益貸本社のような近代的な貸本店が出現する大きな要因となっていたことは間違いない。そして、さらに明治二十年代にはいと、ミステリー小説の一大ブームが巻き起こる。黒岩涙香や丸亭素人らの欧米探偵小説の翻訳が、ようやく台頭してきた庶民を中心とする読者層の関心をさらっていたのである。しかし、一般読者は、そうした小説を読みたいと思っても、一冊三、四十銭もする書物を購入するゆとりはなかった。第一、その類いの小説というのは、一度読めばそれで目的は達成され、とくに購入して自宅に置いておかなければならないという性質のものではない。そこで注目されたのが貸本店である。明治二十年前後に起こった新興の貸本店は、それまでの伝統的な貸本屋（大量の荷物を背負って市中

を一軒一軒貸して歩いた」とは違って、教科書でも参考書でも小説でも何でも揃えているということの一つの売り物にしていた（岩本米太郎「明治初年の古書業界」〔反町茂雄編『紙魚の昔がたり』所載〕。とくに、最新刊の小説類となると、東京図書館等の公共図書館にも劣らぬ豊富な品揃えを誇る貸本店も少なくなかった。世の小説好き、とくに涙香らの探偵小説ファンにとっては、貸本店は公共図書館以上に身近な存在、なくてはならぬ存在となっていたと想像されるのである。十八、九年の英学熱により命を吹き込まれ、二十年以降の小説ブーム、とくにミステリー小説ブームによって成長をとげていった貸本店、それが新しい形態の明治の貸本店ということになるだろう。

このように、書物が贅沢品であった時代の文芸書（つまり必需品でない書物の代表）の受容形態というのは、それを直接購入するという形の受容ではなくて、貸本屋から、あるいは図書館から借りて読むという間接的な受容が数字の上からすると圧倒的に多かったということを銘記する必要がある。先ほどわたしは当時の書籍の出版部数は、教科書を除くとほとんどが二千部程度どまりであったといったが、二千部の発行だから単純に千人程度の人間しかそれを読まなかったということではない。仮に全国に貸本店が百店あったとして、一店が百人づつに貸し出せば、合計すると一万人が読んだことになる。そのほか公共図書館のことを考慮にいれると、その数はさらに増加する。明治期の西洋文学の受容を問題にする際に、われわれがまず考えてみなければならぬのは、こうした間接的な文学の受容である。